

♦ 投影の魔鏡 ♦

人に下賜された後、
女神のところに戻っていない神器の一つ。
自分の望む景色や人物を映し出す能力を持つ。

魅惑の銀鐘

投影の魔鏡たちと
行動を共にしている神器の一つ。
神器たちからは
「口説き魔」と言われている。

♦ 神聖なる水鏡 ♦

王宮に保管されていた守護の神器。
プライドが高く、アナスタシアと
契約することを渋っている。

♦ アナスタシア ♦

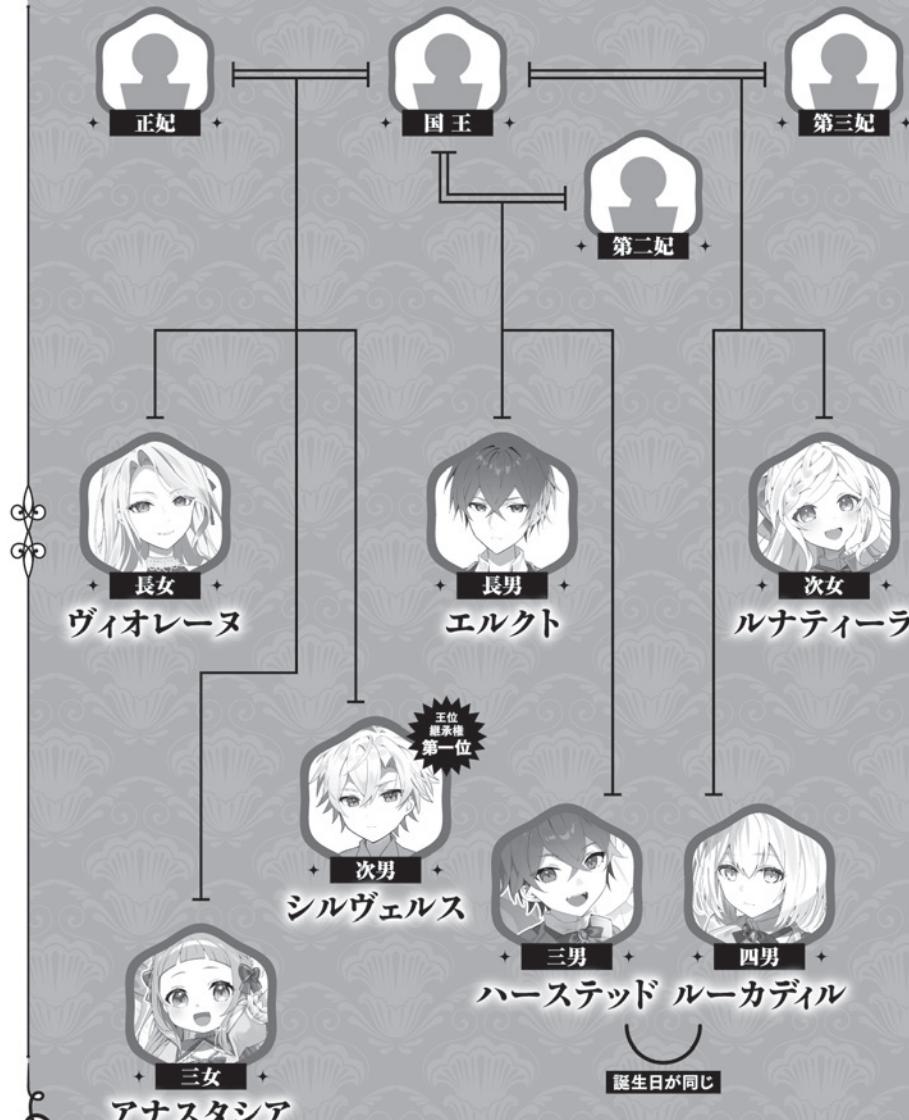
本作の主人公。
魔力なしの落ちこぼれ転生末王女。
女神の頼みで、各地に散らばった
神器を密かに集めることに。

主な登場人物

ライ/神雷の金剣

女神より与えられた神器。
本性は剣だが、姿を変えて
アナスタシアの側にいる。

・アルウェルト王家 系図・



も連れていけば気が紛れるかと。現に、連れていぐと喜んでいる様子でした」

まったく表情を変えずに淡々と告げるエルクトを国王は訝しむ。

そんな理由などあるかと思うが、アナスタシアが空から降つてきた直後は震えるばかりでろくに話せていなかつたという報告は、他の王子や王女から受けている。それゆえ、この説明にも一定の理解を示さざるを得ない。

アナスタシアがあの動物を可愛がつてゐることは国王も知つてゐる。侵入者から攻撃されて恐怖心を抱いた気持ちを落ち着かせるためにどこのであれば……少なくとも、動物を連れていったのがアナスタシアのためというのは確かなのだろう。それにあの動物を連れていったところで、エルクトに利があるとは思えない。

だが、その後になぜか魔法薬の素材を惜しんで学園の森のほうに向かつたという報告があることから、本当に恐怖を抱いていたのかという疑問が生まれてあり、素直に納得できるものでもない。

「（）用件が以上でしたら、これで失礼させていただきたく」

「……ああ、戻れ」

国王が退出の許可を出すと、エルクトは一礼して静かに部屋を出ていく。

部屋には国王と側近のルーカスが残された。

「……やはり話さんか」

「予想していたことではあるでしょう」

ルーカスの言葉に、国王は深くため息をつく。それは呆れから出たのか、もどかしさから出たのか、本人にもわからなかつた。

「……報告を」

「はい」

ルーカスは学園から届いた調査報告の内容を告げる。

先日、アナスタシアとカイエンの証言も報告されていたが、二人を襲撃した存在や、カイエンの目撃した子どもについてはわかつておらず、学園は調査を行つていた。

「正体不明か」

「はい。明らかな魔法戦闘の痕跡がありますが、国内に該当する者はいないと」

学園の森は木々がなぎ倒され、撤去した後には開けた空間が広がつていて。明らかに魔法によるものだが、そのような大規模な魔法を使ひできる魔法使いは存在が確認されていない。

できるとするならば、アルウェルト王家の血筋の者くらいだろうか……ほとんどの者は騒動の鎮圧に動いており、現場にいたのはアナスタシアとエルクトのみ。アナスタシアではあのような魔法の行使は不可能であり、エルクトは本人が否定している上に、剣を主体とする彼の戦闘スタイルとも合わない。

「今回の件もそうですが……アナスタシア王女の周りでは不可解なことが多いように思われます」幼い頃から暗殺者に狙われたなどしていたが、それは王族ならばそうおかしなことではないとい

う頻度に留まつていた。

「だが少女式——六歳になるとき生きていることを神に感謝する儀式で、その際に神から技能や魔力など何かしらが下賜される——の後から、王女には不審なところが目立つようになつた。

部屋では誰かと会話をしているかのような一人言が多くなり、表情をコロコロと変える。

その程度ならばまだいい。他にも騒動を起こしており、極めつけは国宝のペンドントが盗まれた

際に、なぜかアナスタシアは寝間着姿のまま外出し、犯人と対峙していた。

エルクトからの報告では、不審者を見かけて後を追いかけてしまつたとのことだったが……素直に頷くことができない。

「侵入者を撃退した存在も、アナスタシアが世話をしている動物の正体も、判明していないのだつたな」

「はい。動物に関しては存在が確認されていないだけという可能性を見いだしてあります、もう一つのほうに関しては、近ごろそのような報告がなく、調査も進められていない状況です」

アナスタシア王女を狙う侵入者が減つてきたのは、彼女があの動物を見つけた頃からだつたが、単なる偶然だろう。

「ただ……どこか引っかかる。これを偶然で片づけていいとは、ルーカスには思えなかつた。

「本当に偶然だと思うか？」

自分の心を見透かすかのような国王の発言に、ルーカスはぶるりと体を震わす。

「偶然、と片づけるのは難しいと思われます」

「エルクトから話を聞ければ早いが……あやつは口を開かんだろうな」

エルクトは、国王の指示でアナスタシアの警護を行い、近況を報告する役割が課せられていた。その任は今も継続しているが、近ごろアナスタシアとの交流がやたらと増えている。

アナスタシアにエルクトが呼び出されることもあるし、エルクト自身も、アナスタシアについている護衛——影を追い払つて二人きりになることがあるくらいだ。

「エルクトさまは何かをこ存じだと？」

「そうでなければ、わざわざアナスタシアについている影まで追い払うことなどしないだろう。私に知られないための行いのはずだからな」

アナスタシアは知らないだろうが、彼女には王家所有の影を護衛として配置している。一度本人と接触しているが……とうに忘れられていそうだ。

「エルクトさまが難しいのであれば、アナスタシアさま本人に聞くしかないと思われますが」

「そうだな……」

国王は俯きながら、そう呟いた。

第一章 新入生歓迎パーティー

離宮の一室。私——アナ斯塔シアは、ある人物を待っていた。

しかし暇で暇で仕方なく、ライ——トラの姿に擬態している神器『神雷の金剣』の毛並みを堪能するくらいしかやることがない。

『他にやるべきことはあるだろうが』

私にまさぐられているライは念話で語りかけつつ、部屋の一角を指差す。

そこには、本が山積みになっていた。その内容は、各領地の特産品に関する資料だったり、マナーについての教材だったり、すべて社交に関する参考書である。

『後でちゃんと目を通すつて』

『そのセリフ、三日も言い続けてるぞ。その“後”とやらは、いつ来るんだろうな?』

ライの言う通り、どうしても読む気が起きない私は、後でやると言つてずっと後回しにしている。

でも、私も王女ですから。ちゃんとやりますよ……やる気が出たら。

『だから、そのやる気はいつ出るんだつづーの!』

『いつかは出る!』

『まつたく出る気配がねえから言つてんだろうが!』

『いつもいつも飽きないよなあ……お前たち』

もう日常と化した、私とライによる他人から見れば次元の低い争いに、ペンダント——神器『神聖なる水鏡』が呆れ果てるという光景に、平和を感じる。

指輪の神器には逃げられちゃつたし、まだラフィティクト公爵の暗躍の可能性とか、いろいろと考えないといけないことはあるけど、今はこの日常を味わつてみたい。

『話をそらすな。勉強しろ』

『だからいつか……ね?』

今はその時ではない。時を待つのだ。

その後もうだうだ言うライをたしなめていたら、コンコンとノックが響く。

私が「どうぞ」と許可を出すと、ドアがゆっくりと開く。

そこに立っていたのは、私と同じくらいの背丈の少年。夜空を思わせるようなネイビーの髪はいつも以上に暗く、ルビーのような朱色の瞳は輝きを失っていた。

それだけで、何があつたのか薄々察しがついてしまい、私は彼に同情の目を向ける。

『お疲れさま……カイエン』

『本当に、殺されるかと思いましたよ』

少年——カイエンは、深くため息をつきながら部屋に入つてくる。

私は、ベッドからクッションを一つ持ってきて床に置いた。
「座つて休んで。お茶を頼むから」
私はベッドの傍らに置いてあるベルを鳴らす。すると、間もなく使用者がやってきた。
「私とカイエンのお茶とお菓子を持ってきて」
「かしこまりました」
私の指示を受けて、使用者はすぐさま立ち去る。

私が用意したクッションに座つたカイエンに、私は意を決して尋ねる。
「ルナティーラお姉さまとシルヴェルスお兄さま？」
「そこに、ハースティード王子殿下とルーカデイル王子殿下も加わつておりました」
全員やないかい！ いや、なんとなく想像はできていたけど、本当にカイエンに申し訳ない……！
「私のことになると、ああなるの」
「いえ、覚悟の上ででしたので。あれくらい退けなければあなたの側近は務まらないとわかつただけでも僕偉です」
カイエンは先日、私の側近となつた。立会人はエルクトお兄さまで、エルクトお兄さまがお父さまたちや他の兄姉にも報告した。

みんな、私に早々に側近ができたことに喜んだのに、なぜか私抜きでカイエンに会いたいと言つてきたのだ。



そのためカイエンはわざわざ登城し、兄姉たちに会うことに。学園でやろうとすれば目立ちすぎるし、側近となつたカイエンはお城の出入りも自由になつたためだ。

だけど、兄姉たちの思惑に気づかないほど私もバカではない。私は事前にカイエンに、嫌なことがあればいつでも帰つていいと言い含めていた。

それでもカイエンは甘んじて受け入れたようだ。一体どんな会合だったのかは想像できないし、したくもない。

「それに、普段の^{かんぱん}瘤癩に比べれば理屈が通つている分、遙かにましですよ」

「普段の瘤癩？」

「ええ。頭を殴られたり、髪を引っ張りあげられたり、胸ぐらを掴まれたりしてます」「それ瘤癩じやなくて暴力だよ！」

「誰にやられてるの？ 私ががつんと言うよ？」

「姉のルージアです。しかし、アナ斯塔シアさまの助けは必要ありません」

ルージア……というと、カイエンの同い年の姉で、確か一年生の上級クラスに所属していたはず。伯爵家あたりの子女だと、本人の持つ魔力の関係から、学園では上級クラスと中級クラスの半々くらいに分かれることが多い。そんななかで上級クラス入りできるのは、さすがは魔力主義のルーメン派閥の幹部のご令嬢というところか。

でも、人間性にかなり問題がありそうだな。できることなら関わりたくない。

「それなら、私の側近になつた時も何か言われてそうだけど」

「ええ。無能には無能がお似合いねと嘲笑^{あざわら}われましたよ」

「あつ、本当にそう言われたんだ……」

カイエンが側近の誓いをしてくれた時に、家族のことを聞かれてそんな風に言うだろうと答えていたのは覚えていた。

「ということは、伯爵は……」

私のその言葉に、カイエンはにこりと笑みを返すだけ。それが答えだということに気づき、私はそれ以上は何も聞かなかつた。

◇◇◇

使用者たちがお茶とお菓子を持ってきたので、二人でお茶をする。

カイエンには、側近は本来は主の後ろに控えているべきで、向かい合つて一緒にお茶を嗜む^{たしな}なことはしないと言われた。

だけど、私がお茶を用意してもらつたのはカイエンを^{いたむ}守るためなので、主としての命令^{あるじ}という形で向かい側に座らせている。

「それで、あれはなんですか？」

カイエンの視線は山積みになつた本に向かっている。

「私の……教材」

「……座学の認定試験は合格してらっしゃるのに、なんの教材ですか？」

「社交関係」

私がそう答えると、カイエンの目が冷たくなる。それは、お世辞にも側近にふさわしい目つきとは言えなかつた。

「のんきにお茶を飲んでいる場合ですか」

「まだ余裕はあるから大丈夫！」

「あれは新入生歓迎パーティーに向けたものでしよう？」もう残り一週間ですが」

そう。私たちが学園のトラブルで慌ただしくしている間に、新入生歓迎パーティーがすぐそこまで迫つっていた。

本当ならもう少し早い時期から学び直しを行うはずだつたんだけど、私の場合は学園での騒動により学園から頻繁に呼び出しを受けていて時間がなかつた。そのため、かなりギリギリのスケジュールで詰め込み教育が施されることになつた。

とはいゝ、今はそれもある程度は終わり、マナーを教えてくれる侍女のフウレイから合格はもらつてゐる。ただ知識を衰えさせないよう、当日までに熟読しておくようにと渡されたのがあの教材だ。

「私がゆつくりと勉強したところで頭に入らないから、直前で詰め込むほうがいいの」

「言つてて恥ずかしくならないんですか？」

「事実だから」

私だつて眞面目に勉強しているのだ。でも、新たな知識を得る度に、古い知識が抜けしていくから仕方ない。

それなら一気に詰め込んだほうがいい。

「そういうカイエンはどうなの？」

「伯爵家として恥ずかしい程度には振る舞えますよ。あなたの補佐は難しいかもしませんが」「私の補佐をする前提の言い方はやめてくれない？」

まるで、私一人では社交をこなせないとでも言つているようなものじやないか。

「申し訳ありません。学園での振る舞いを愚考しての発言だつたのですが……」

カイエンが尻を下げながら言う。私もはあとため息をつき、頬杖ほおづえをついて返した。

「……確かに普段の振る舞いを思うと、私もあなたを批判から庇かばうのは難しいかもしないけれど……」

「それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味だけど」

私がニコニコしながら答えると、カイエンは大きくため息をつく。本当に先ほどから振る舞いが

失礼な側近だ。

「ご安心を。私がこんな態度を取るのはアナスタシアさまと二人きりの時だけですので」「それが問題なの！」

普通は主を一番に敬うべきなのに、どうして私が一番下みたいな扱いを受けなくちゃならないんだ。

あと、厳密には二人きりじゃないんだよ。この場にはライとペンドントがいて、この会話もばつちり聞かれてるから。

カイエンには、まだライたちのことは話していない。神器探しに巻き込まないに越したことはないし、お兄さまのように突出した戦闘能力があるわけでもなさそぞだから。

だからこそ、私もばれないように細心の注意を払い、神器たちにもカイエンといふ時は不用意に話しかけないように言つてある。

「ではアナスタシアさまは、私が丁重に尽すことを希望なさるのですか？ 我が君のお望みならば、今後はそのように振る舞わせていただきますが」

「……いや、それはそれで寒気がするから嫌だけど……」

「なんだかんだ、カイエンとは一ヶ月ほど一緒に過ごしている。その間カイエンはずつとこのよう

な調子だったので、急に側近として模範的な振る舞いをされると調子が狂つてしまうだろう。

我が君、と呼ばれるだけでもぞくりしてしまうのに。

「でも、せめて周りと同列くらいにはしてほしい」

「それでは、他の王族の方々への無礼になるかと……」

だから、なぜそこで私を上げるのではなく、周りを下げる判断になるの！

「カイエンに常識的な振る舞いを求めるほうが間違つてたか……」

「アナスタシアさまにだけは言われたくないのですが」

「そんな私に言われるくらいに非常識という自覚を持つたら？」

さすがに言い返すことができなかつたのか、カイエンは静かに目をそらす。

カイエンの私の評価が低すぎる気がする。一応、カイエンは自分の意思で私を選んでくれたはずなんだけど。

「……ともかく、勉強はなさつたほうがよいでしょう。詰め込むにしても、読みきれなければ意味がないのでは？」

「……最悪徹夜すればなんとか」

「側近として、主が不健康な生活を送ることは容認しかねます。場合によつては、殿下方にご相談することになると思いますが」

「それはダメ！ 勉強が厳しくなる！」

普段は私に結構甘々な兄姉たちだけど、教育関連だと鬼になるんだつて！ それは、少女式の時とこの間の認定試験に向けての勉強で充分すぎるほどに味わつてゐる。

王子や王女として教育されるとああなるのだろうか？

「では、大変心苦しいですが、アナスタシアさまがお勉強なさらないことを相談するようにします」

話聞いてました!?

そのまますくっと立ち上がり出でていこうとするカイエンの服を掴む。

「待つて！ やる！ やるから！ 今からやるから！」

出でいかせまいと、カイエンの服をぐいぐいと引っ張る。

カイエンは動きをピタッと止めて振り返り、笑顔で言う。

「では頑張りましょうか、我が君」

「うん……」

私は力なく頷いた。

『どつちが主かわからんな』

ライのぼやきが脳内に響いた。

◇◇◇

カイエンの策略により、泣く泣く勉強することになつた私は、教材を読み込んでいた。

サボろうにも、カイエンが監督官のように後ろに張りついている。

勉強するからには眞面目にやろうと、なんとか内容を頭に詰め込もうとはしてゐるんだけど……

「全然覚えられない……」

二十ページほど進めたところで、私は机に突つ伏した。

ちなみに、まだ一冊目である。

「まだ半分も終わつてませんが」

「だから言つたじやん。私は詰め込みじゃないと覚えられないって」

勉強は一夜漬けは意味がないと言うけど、それは記憶でくる優秀な頭脳を持つてゐる人だけが言えるセリフであつて、ニワトリ頭に計画的な勉強はまったく意味がないのだ。

そして私は根っからのニワトリ頭である。前世でも、テストは前日に教科書を読み込むタイプだつた。

頭脳くらいアルウェルト王家らしく高性能でもいいじゃないですか、女神さま。

『お前は中身が中身だからなあ……』

『ライ、カイエンがいるからあまり語りかけてこないで』

ライの野次を一蹴しつつ、私はもう一度教材を見る。でも、だんだん記号が羅列してあるだけのようになってきて、ゲシュタルト崩壊寸前の状態だつた。

「もう無理だあ……」

「それでよく座学の認定試験に受かりましたね……」

カイエンが呆れたようにため息をつく。あれは、お兄さまたちのスバルタ教育あつてのものだよ。言つたら呼ばれそだから黙つてるけど。

「あの時は、合格したい理由があつたからだよ。でも、パーティーはどうしても完璧に終わらせたい理由がないから、やる気が出ないの」

評判を得るために上々の結果を残そうという気持ちはあるものの、最低限王女として振る舞えればいいやと思っている私もいるのだ。

私は単純な人間だ。やる気は目標がなければ絶対に出てこない。

「要は、やる気が出ればいいと？」

「まあ、そうなるかな？ でも、やる気なんて出そうとして出るものじゃないし」

自分の意思で出し入れできるなら、私はとっくにこの教材を読み耽つてることだろう。

「……そうですね。今は難しいでしよう」

カイエンの含みのある言い方に首を傾げる。その意味を、私は翌日に知ることとなつた。

◇◇◇

翌日。私は今日も勉強していた。やらなかつたらお兄さまたちに言いつけられそだから仕方ない。

い。カイエンも監視のためか今日も側そばにいる。まあ、自宅では針のむしろだらうからそれは構わない。でも、昨日もろくに内容が頭に入つてこなかつたというのに、今日で劇的に変わるはずもなく、私は早々に机に突つ伏した。

「甘いもの……甘いものが欲しい……」

私の脳は深刻な糖分不足に見舞われていた。このまま勉強を続けたところで、何も入つてこないだろう。

「では、これでも食べてください」

カイエンはそう言つて、私にクッキーを渡してくる。

クッキーなんて頼んでたつてと思いながらも、念願の糖分を渡された私は、流れるようにクッキーを口の中に入れた。

「ん！ おいしい！」

食感はサクサクとしており、ほどよい甘さとバターの風味が口に広がる。店で売つてもおかしくないよ、このレベル。

でも、なんかお城で食べたものとは味が違うよな……？

「ねえ、これつてお城のものじやないよね？」

「はい。俺が作ったものなので」

カイエンの言葉にやつぱりと思つて一口目を食べようとした時、私はピタッと動きを止めた。

「作ったの!?」

あのカイエンが!? という言葉は口から出ることはなかつたけど、顔には出ていたのか、カイエンの目が冷たくなる。

「……そんなに意外ですか」

「だつて、カイエンつて伯爵家でしょ？ 廉房に立つことなんてなさそうだから」

まだ男爵家や子爵家とかなら、使用人も多くは雇えないため、夫人が台所に立つことは珍しくない。その一環で、子どもが家事を手伝うこともある。

だけど伯爵家なら、屋敷に見合うだけの使用人を雇う財力はあるはずだ。

フォーケマー伯爵家は、ルーメン派閥でも幹部クラスにいられるほど家の力も強いし。

「屋敷で作られたことがあるんですよ。よく使用人の真似事をさせられたので、その一貫で」

「……そうなんだ」

私は熟考した上で、そう返事をすることしかできなかつた。お菓子を作れる理由が、こんなにアリケートなものだとは思わなかつた。

カイエンが普通の伯爵令息として過ごしてきたわけじゃないことは、今までの言動でなんとなくわかつてたけど、なんかなあ……

ここまでとは思わなかつたというか、それにしては貴族らしいところもあるというか……

うーん……言葉にするのが難しいな。

「お気になさることはありません。俺は気にしていませんので」

「でも、お菓子を作らされたんでしょ？」

料理というは生活と趣味のために作るからよいのであつて、人の指示で作らされるのは苦痛でしかないだろう。

カイエンつて、料理好きな感じでもなさそuddash;うだし。それに、まだ六歳ですよ？

「叱責されるよりは、見下されるほうが遙かにましなので」

「そ、そ、そ、う……」

「一体、どんな扱いを受けてきたら六歳児がこんなこと言うんですか。その目も、まるで五十年は生きてきた大人みたいに達観してゐるし。

「でも、そのお陰でおいしいお菓子を食べられるから、役得つて思つておくよ」

私がはにかみながらクッキーを食べると、呆れてる感じはあるけど、カイエンはふつと笑う。

「ええ、そう思つておいてください」

私はパクパクとクッキーを食べて、糖分を補給した。まだ何枚か残つているものの、糖分は充分だよし、勉強再開!

糖分補給をしたためか、それなりに摂る。ペースはあまり変わつていないけど、記憶に残りやすくなつてゐる。

でも、いきなり全部を覚えられるわけではないので、半分くらいは脳内を素通りしてしまふ。

そして、それを覚えようとすればするほど糖分は消費されていくのだ。

その結果——

「よし、休憩」

「早すぎませんか？」

私はものの十分で二回目の糖分補給をした。残っていたクッキーを二枚、口に運ぶ。まだ残っているから大丈夫、多分。

「このペースでは期限までに終わりそうにありませんが」

「大丈夫。追い込まれたらなんとかなる！」

「その根拠のない自信はどこから来るのですか？」

「実体験からだけど」

現に、スバルタ教育で身につけた知識や技術は、時間の経つた今でも九割くらいは記憶に残っている。

だからこそ、私は追い込まれたら強いタイプだと思うけど、そんなことを詳しく話したらお兄さんたちを召喚するに決まっているので、墓穴を掘るようなことはしない。

でも、ある程度察しがついたのか、カイエンは私に背を向けて言った。

「そうですか。では、厳しい教育をなさるという他の殿下方に助力を仰ぎましょう」

「待つて！ 大丈夫だから！ 自分でなんとかできるから！」

私はしつかりとカイエンの服の裾を掴んで止めたけど、カイエンはさりげなく私の手を振りほどいて部屋の外に向かう。

「追い込まれたらなんとかなるのでしょうか？ なら、エルクト王子殿下やヴィオレーヌ王女殿下あたりがいいでしょうね。他の方たちはアナスタシアさまに甘そうですし」

「ダメ！ ヴィオレーヌお姉さまには言わないで！」

「わかりました。ヴィオレーヌ王女殿下にご相談します」

「わかつてないよね!?」

「本当にダメなんですって！ マナーに関することになると本当に厳しいんだから、あの人！」

ヴィオレーヌお姉さまのことだ。報告を受けたら、お妃のアリリシアさまやシユリルカお母さま

にも話が行くに決まってる。

「そうなつたら、少女式の悪夢の再来だ……！」

「あの人たちはね、頭のネジが爆発して吹き飛ばされてるの」

「……はい？」

カイエンが珍しくすつとんきような声を上げた。私は声のトーンを下げて言葉を続ける。

「休憩は水と食事オンリー、おはようからおやすみまで隙間なしのぎちぎちプログラム。お菓子なんて甘いものは当然なし」

「……アナスタシアさま？」

カイエンは、振り返つて私のほうに寄つてくる。私は、さらに声のトーンを低くした。

「アメなんてもらえずにムチだけ。いつもの笑顔は遙か彼方に消え去るんだよ」

「それで……？」

「まだ私の話が理解できていないカイエンをきっと睨みつけた。もしかしたら、軽く涙ぐんでいたかもしない。

さすがに驚いたのか、体をびくつかせたカイエンの腕をしつかりと掴み、私はおもむろに叫ぶ。
「そんな教育を一週間みつちり受けてパーテイーなんかに出たら、私は燃え尽きて死ぬに決まる!!」

まだ少女式と認定試験はよかつた。周りに人はいるものの、基本的には個々に行われる。でも、パーテイーとなると話は別だ。パーテイーに限らず社交の場は、基本的に人と関わらないことは不可能だ。常に笑顔を向けて、相手の言葉に神経を研ぎ澄ませていなければならない。

家族やカイエン相手とは違い、腹の探りあいが行わられるのだ。

スパルタ教育でへとへとの状態でそんなことをすれば、私は間違いなく途中で力尽きる。たとえ乗りきれたとしても、その後しばらくは燃え尽きて灰になつていることだろう。

私はカイエンの腕を握つている手の力を、さらに強めた。

「だから、一人でどうにかするの。わかった？」

「は、はい……」

「なら、黙つてそこに座つてて」

私が床を指差すと、カイエンは素直に床に座る。

それを確認した私は、再び勉強机に向き合う。

「私のことを思うなら、お菓子はちょうどいい。糖分補給するから」

「かしこまりました……」

そのまま黙々と勉強をする私の脳内に、『おつかねえな』という声が響いた。

◇◇◇

どうにかフウレイの用意した教材をすべて読破し、パーテイー当日を迎えた。

以前、お姉さまたちとお出かけした際に注文したドレスに身を包んだ私は、小さくため息をつく。
『ねえ、ついてきてくれない？』

『行かねえって言つてるだろ』

私は、部屋でくつろいでいるライに念を送るものの、ライからの返答は冷たい。

『だつて、一人で行くのはやつぱりつらいし』

『どうせ、話しかけるなつて言つんだろ。なら、俺がいてもいなくても変わらんだろうが』

『そ、それはそうだけど、もつとちゃんとした理由だつてあるの』

『さつきのがちゃんとしてないって言つてるようなものじゃないか』

『ペンダントの野次は無視して、私は理由を話す。

『指輪が乱入してくるかもしないでしょ?』

『吸魔の指輪』という神器は、リルディナーツさまに回収を命じられた神器の一つでありながら、

なぜかペンダント——水鏡のことを狙つている。

あの時はライに敵わないと踏んで逃げられたけど、また来る可能性はある。だからこそ、ライに側にいてほしい。

『それなら、しばらくは大丈夫だろ。あのバカでも、お前が俺の主つてことには気づいてるだろ? から、俺を警戒して現れないはずだ』

『でも、神器つてお互いの気配を感じ取れるんじゃないの?』

ライもペンダントの気配を感じて私を外に連れ出していたし、ペンダントも指輪の気配を感じ取つていた。

だから、ペンダントの気配しかないとわかれれば、指輪が仕掛けてくる可能性はありそうだ。

『察知できるのは実体化してたる神器だけだ。主の精神と同化してると、主の魔力に溶けてる状態になるから、その主に触れでもしない限りは察知できない』

ペンダントが代わりに答えてくれて、なるほどと私は納得したけど、ライはなぜかじつとペンダントのほうを見ている。

『ライ、どうかした?』

『……いや、なんでもねえ。それより、さつさと行きな。遅れたら意味ねえだろ』

『はーい……』

ふうと一息ついて、ドアノブに手をかける。

私はげんなりとした気持ちをなるべく隠しながら部屋を出た。



離宮の外に出た私は、すでに待機していた兄姉たちに出迎えられた。

新人生歓迎パーティーなので、学生は基本的に全員参加。そしてなんと、お父さまやお母さまたちも参加するんだって!

レーシヤン・マナに通う生徒たちは、国の未来を担う人材と言つても過言ではない。そんな彼らの催しに顔出しあしておくのは、国王として意味のあることなのだろう。

でも、普段のお仕事もあるから、本当に顔見せするだけらしいけど。

そんなわけなので、出迎えてくれるのは兄姉たちだけなのだ。

そして当たり前だけど、パーティーのため、全員がきらびやかな衣装を身に纏つている。その眼福すぎる光景に、感嘆のため息がこぼれる。

(全員別格だあ……!)

ヴィオレーヌお姉さまは紺色を基調としたドレスに銀糸の刺繡、まるで夜空を纏っているかのようだ。袖口や裾のフリルも黒く、シックな雰囲気がある。

夜の女神とたとえられそうな佇まいに圧倒される。

あつ、新入生歓迎パーティーは、招待状さえあれば生徒以外も参加可能ですよ。いろいろな家と繋がれるチャンスなので、どうにか招待状を手に入れて参加する貴族も多いみたいだ。

ヴィオレーヌお姉さまはすでに学園を卒業しているものの、パーティーには出てくれるみたい。

ありがたいような、不安が募るような、複雑な心境ですけども。

エルクトお兄さまは黒のジャケットコートを身につけている。襟や袖口には金糸の細やかな刺繡。今のお兄さまはまるで騎士みたいだ。とても強いし気遣いもできるから、頼りがいがある騎士さまだ。

ルナティーラお姉さまは私がチョイスしたドレス。クリーム色に銀糸の刺繡。袖口や裾には白いフリルがあしらわれており、胸元にはブラウンのリボン。

やつぱりお姉さまに似合う！ あれにして正解だつた！

シルヴェルスお兄さまは紺色のフォーマルジャケットに金糸の細やかな刺繡。デザインはエルクトお兄さまと似ているけど、色合いや雰囲気から、シルヴェルスお兄さまは貴公子みたいだ。

これは、さぞモテモテでしようなあ。でも、やつぱり可愛いんだよな、お兄さまは。

ハーステッドお兄さまはダークヒーローにしか見えない。白いフリルシャツ、黒のロングコート

に赤い紐リボン。シンプルながら、それがお兄さまのダークな雰囲気を引き立てている。これは、刺さる人には刺さるタイプだ。私は好き。

ルーカデイルお兄さまはもう直視できない。青緑のフォーマルジャケットに青い蝶ネクタイの姿が尊すぎると、

あの姿で微笑まれでもしたら、信者をさらに増やしかねない。

私は完全にドレスに負けているけど、お兄さまたちはさらに磨きがかかつていて。

この兄姉の中に混じるとなると、空気になるどころか異物になりそうで、今にも不安が最高潮に達しそうだ。

「わあ！ アナ可愛いね！」

真っ先に私を褒めてくれたのは、シルヴェルスお兄さま。

「ありがとうございます。お兄さまも可愛いです！」

「やつぱり可愛いなんだね……」

シルヴェルスお兄さまはしょんぼりとしてしまう。だって可愛いんだから仕方ない。

「俺は？」

「僕はカッコいいでしょ～？」

ルーカデイルお兄さまとハーステッドお兄さまが、褒めてとばかりにキラキラとした目で私を

見る。

「ハースティッドお兄さまはカッコいいんですけど、ルーカデイルお兄さまは尊いとしか言いようがないません……」

「尊いってなんだ……？」

「制服姿を褒めた時もそعدたけど、もしかしたらこの国には尊いという言葉がないのかもしれませんよ。」

「制服姿を褒めた時もそعدたけど、もしかしたらこの国には尊いという言葉がないのかもしれません。それか、褒め言葉としては使わないのかも。」

「でも、尊いという言葉は説明を要する言葉ではない。インスピレーションで感じ取ってもらおう。」

「アナ～！ 私は～？」

「ルナティーラお姉さまもどつても可愛いです！」

「私がチョイスしたドレスだから当然だけど、実に私好みです。今日しか見られないと思うと実にもつたいない。」

「今度は私もアナにドレス選んであげるからね」

「はい！」

私は元気に返事をするけど、周りの空気が冷たい。

周囲に視線を向けると、こちらに冷たい視線を向けてくる兄たちがいた。

「はい！」

私は元気に返事をするけど、周りの空気が冷たい。

周囲に視線を向けると、こちらに冷たい視線を向けてくる兄たちがいた。

「はい！」

私は元気に返事をするけど、周りの空気が冷たい。

周囲に視線を向けると、こちらに冷たい視線を向けてくる兄たちがいた。

参加していないのはヴィオレースお姉さまとエルクトお兄さまくらいで、この二人は呆れた視線を向けている。

「ルナティーラ姉上、私もってどういう意味ですか？」

「シルヴェルスお兄さまの言葉に、ルナティーラお姉さまはなぜか勝ち誇ったように答える。」

「このドレスはアナが選んでくれたのよ。だから、今度は私が選んであげるってこと」

「ちょっとお姉さま！ この人たちにそんなこと言つたら……！」

「姉上だけずるい！ 僕たつて選んでもらいたいのに！」

「俺だつて……」

ハースティッドお兄さまとルーカデイルお兄さまから不満の声が上がる。

「シルヴェルスお兄さまはと思つてると、お兄さまが私のほうに近づいてきて言つう。」

「アナ、今度は僕と一緒に出かけようか」

「えつ？ で、でも……」

お姉さまたちと違つて、王位継承権一位で正妃の息子であるシルヴェルスお兄さまは、そっぽいと出かけられないのでは……？

「そんな心の声が顔にも出ていたのか、シルヴェルスお兄さまは「安心して」と私の肩に手を置く。「理由ならいくらでも作れるから」

「あれ？ 理由つて作るものでしたつけ？」

「じゃあ、僕とも一緒にお出かけしよー」

ハーステッドお兄さまが、シルヴェルスお兄さまの手を引き離しながら、私に笑顔で提案する。引き剥がされたシルヴェルスお兄さまは不満げな顔をしている。

「俺も……」

ハーステッドお兄さまの袖をくいくいと引っ張りつつ、ルーカデイルお兄さまが訴える。

同い年だけど、こういうところは弟っぽいな。

ハーステッドお兄さまは嫌そうな顔をしているものの、仕方ないとばかりにため息をついた。なんか、お兄さまたちとのお出かけが決定したっぽい……？ なら、護衛騎士の三人に話を通しておかないと。

「話はそのくらいにしておけ。そろそろ行くぞ」

「はーい」

私がエルクトお兄さまの言葉に従つて馬車のほうに向かうと、肩にぽんと手を置かれる。この流れはもしかして……？

私がおそるおそる振り返ると、そこにはルナティーラお姉さまがいた。

「アナは私と一緒に行きましょ」

「姉上は帰りでいいでしょう。行きは僕が一緒に乘ります！」

「ええー！ 僕も行きがいい！」

「俺も……」

ルナティーラお姉さまに対し、シルヴェルスお兄さま、ハーステッドお兄さま、ルーカデイルお兄さまが口々に言う。

いつぞやの時のように、誰が私と一緒に馬車に乗るかの争いが始まつてしまつた。

以前と違うのは、行きと帰りで分かれようという考えがあることだろうか。

多分、しばらくはお互に譲らないんだろうな。この意地つ張りな兄姉たちは、折れるまでとても時間がかかるから。

本音を言うなら、パーティーには参加したくないけど、参加しなければならないならさつさと終わらせてしまいたい。だから、折れるのを待つてなんていられない。

「私はエルクトお兄さまとヴィオーレーヌお姉さまと一緒に行きますから」

学園の時とは違つて、今回は七人揃つてるので、四人と三人でバランスよく分かれることができる。

それに、エルクトお兄さまだけでなくヴィオーレーヌお姉さまもセットなので、いつものずるい発言はしにくいはずだ。

お兄さまたちはショックを受けたような顔をしてはいるものの、その口から文句が出てきたりはしなかつた。

そんな兄姉たちに、エルクトお兄さまとヴィオーレーヌお姉さまは冷たい目を向ける。

「行くぞ、アナスタシア」

「参りましょう、アナスタシア」

「は、はい……」

チラチラと後方を気にしながらも、私はエルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまの乗る馬車に乗り込んだ。

◇◇◇

馬車の中で、私はエルクトお兄さまとヴィオレーヌお姉さまと向き合っていた。後方の馬車からはなぜか寒気を感じる。

気のせいだと思つておこう。後ろの馬車の御者は縮こまつてゐるだろうな……

「今日はペンドントを持つてこなかつたのか」

エルクトお兄さまに聞かれた。

「あつ、はい。必要以上に注目を集めないようにしたほうがいいかと……」

本当のところは、ライがついてこないと言つたから置いてきたつてのが正しい。

学園には、私を守るために、お兄さまたちが城を離れるからという理由で持つていつた。ただ、それでも指輪には襲われたし、ライがその場にいなかつたから対処が遅れて、カイエンまで危険な

目にあわせてしまつた。

またそつうなるくらいなら、ライの側にいさせたほうがいい。たとえお城にやつてきたとしても、ライがその場にいれば下手に手出しはできないだろうし。

ペンドントの気配を感じなければ、私にも手出ししないだろう。

向こうが欲しがつてゐるのはペンドントの身柄であつて、私自身ではないはず。

「まあ、賢明な判断ではあるな」

「ええ。あの場で目立つても何もいいことはありませんもの」

エルクトお兄さまの言葉に、ヴィオレーヌお姉さまが同意する。

似た者同士だからか、考へがよく一致してて、二人の意見が食い違うことつて滅多にないんだよね。というか、見たことないし。

「やつぱり、パーテイーでは一人にならないほうがいいんですか？」

フウレイのマナー講座でも、もう一人の侍女のヒマリからも、私はなるべく一人にならないよう

にと言われた。

私は一人のほうが気楽ではあるんだけど……

「格好の獲物だろうからな」

「ええ。少なくとも側近の彼は連れていなさい」

二人から予想通りの答えが返ってきてげんなりする。いや、別にいいんだけど、カイエンの前でお姫さまモードになるのは恥ずかしいんだよね。

カイエンに笑われたら多分立ち直れない。まあ、あのカイエンでもさすがにそんなことはしないと思うし、してたらお姫さまたちにチクつてやろう。

「何かあればハーステッドに頼るといい。俺たちに比べれば、あまり人が寄つてこないだろうからな」「はい、わかりました」

魔法に突出した才を持ち、容姿端麗のヴィオレーヌお姫さま。

兄姉の中で最強と謳^{うた}われる眉目秀麗のエルクトお兄さま。

治癒姫の異名を持ち、女神の化身と称えられるルルエンヴィーラさまと生き写しのルナティーラお姉さま。

王位継承権一位の次期国王で、アルウェルト王家の象徴である金の瞳を持つシルヴェルスお兄さま。

男でありながら、女性と見紛う中性的な顔立ちで多くの信奉者を生み出すルーカデイルお兄さま。この五人と比べたら、ハーステッドお兄さまは少し霞むかもしれないね。それでも、闇魔法はアルウェルト王家でトップクラスの実力だし、容姿もダークヒーロー感があつて私は好きなんだけど。それにハーステッドお兄さまは、一緒に過ごす相手としては兄姉の中で一番だし、頼りやすくはあるかも。

「わたくしたちも、なるべくあなたのほうを気にかけるようにしますが、決して油断しないように」「は、はい」

ヴィオレーヌお姫さまからの注意に私は体を強ばらせる。

危ない危ない。お兄さまたちがいるということに安心感を抱くところだつた。いつでも頼れるわけではないんだし、自分でどうにかできなくちゃいけないよね。

今から、お姫さまモードに切り換えなくちゃ。

◇◇◇

パーティー会場に着いた。

学園の新入生歓迎パーティーは、人数が多いため、学園所有のホールで行われる。その建物は学園の敷地内にはないものの、そこまで距離が離れているわけではなく、学園からなら徒歩で十五分ほどで着くくらいのところにある。

学園でイベントを催す際に使うそうだ。全校生徒とその保護者が集まる規模となると、さすがにあの広い学園でも該当する建物はないんだろうね。

まあ、敷地の外に学園所有の建物があるだけですごいんだけど。「行くぞ」

馬車を降りる時エルクトお兄さまが手を貸してくれる。私とお兄さまは少し身長差があるので、私が手を取りやすい位置に出している。

さらっと気遣いできるところがお兄さまのいいところだ。

「ありがとうございます」

私がエルクトお兄さまの手を取つて馬車を降りると、すでに兄姉たちが待つていた。

「どうして兄上がエスコートするんでしょう？」

「馬車から降ろしただけだろうが」

「その役目は姉上でも……なんだつたら私でもいいわけでしょう？」

私でも、という部分だけ語気が強かつたように感じたのは気のせいかな。うん、そう思うことに

しよう。

「それなら、会場までは僕が連れていきます」

「あつ、兄上^上ずるい！ 僕がやりたい！」

「俺も……」

お兄さまたちは、誰が私をエスコートするかで争い始めてしまった。

「一人で入つたらダメですか？」

「[[「ダメ!!」]]」

こういう時だけ息ピッタリで私の言葉を否定する。

ああ、もう！ この兄姉たちは本当に……！

「では、わたくしがアナスタシアを連れていきますわ。あなたたちは各自でいいでしよう」

断る余地は与えないとばかりに、ヴィオレーヌお姉さまが私の手を引く。

本当に突然のことだったので、私は少しバランスを崩し、ヴィオレーヌお姉さまにもたれかかってしまった。

怒られるかと思つたけど、ヴィオレーヌお姉さまは優しい手つきで私を支えてくれる。それどころか、私の頭を押さえつけるようにして抱き寄せてきた。

えつ？ はつ？ 何事!?

「構いませんわね？」

何やらヴィオレーヌお姉さまが会話をしているみたい。でも、お姉さまらしからぬ行動に困惑していく、会話の内容はほとんど頭に入つてこない。

しばらくして私の頭は解放される。どういうつもりだつたのかと、私は見上げるようにしてヴィオレーヌお姉さまと目を合わせた。

「あの——」

私が真意を尋ねようとすると、お姉さまは口元に人差し指を当てた。

何も聞くなど言つていることは、それだけで読み取れた。

「では、行きましょうか」

「は、はい……」

結局、お姉さまの謎行動の真意はわからないまま、私は会場入りした。

◇◇◇

パーティー会場はすでに大勢の人でごった返していた。各々が交流を重ねて、人々の声が音楽と共に鳴するかのようになっていた。

そして、そんな賑やかな空間は、さらに盛り上がる事となる。

レニシェン王国トップの権力者であるアルウェルト王家が入場してきたのだから。その盛り上がりぶりは、まさにライブ会場さながら。

「ヴィオレーヌさま、美しい……！」

「エルクトさまだわ！ 素敵……！」

「ルナティーラさま、なんて可憐なんだ……！」

「シリヴエルスさまも気品があるわ……！」

「ハーステッドさまは影があるわ……！」

「ルーカデイルさま……直視できない」

そんな声があちらこちらから聞こえて、改めてお兄さまたちの人気ぶりを再認識する。当の本人たちは普通だけど、むしろ、煩わしいとばかりに顔を歪めているくらい。でも、皆さまの感想には激しく同意します。特に、ハーステッドお兄さまとルーカデイルお兄さまにに関してのものは。

お兄さまたちが注目されているうちに、私はすーっと空気のように会場入りした。私に対する反応は、特に聞こえてこない。

よしよし、誰にも気づかれずに潜入成功。このまま抜き足差し足忍び足で壁の花に……

「何をこそこそしてるんですか？ アナスタシアさま」

「へあつ!?」

後ろから声をかけられたことで、変な声を出してしまった。声の主は、会いたかったような会いたくなかったような人。

「驚かせないでよ、カイエン……」

「私はあなたの悲鳴に驚きましたけど」

呆れた視線を向けてくるカイエンも、きつちりと着飾っている。

髪色と同じ紺色のフォーマルジャケットを着ている。飾り気はあまりないけど、そのシンプルさがカイエンの魅力を引き立てていた。

「カイエンも今日はカッコいいね」

立ち読みサンプル
はここまで